

半数以上海外に出願

(上)

広島叡智学園 初の卒業生

グローバルな視野

広島叡智学園（大崎上島町）は3月、初めての卒業生を送り出す。県立の全寮制中高一貫校で、世界共通の教育プログラム「国際バカロレア（IB）」を取り入れたカリキュラムが特徴。世界に通ずるリーダーの育成を目標に、生徒の主体的な学びに力を入れる。「グローバルな視野」と「地域に根差した心」を重んじる学校の現在地を探った。

（渡部公揮）

昨年12月中旬、高校3年生45人が1年の冬から受けてきたIBのディプロマプログラム（DP）



古市主幹教諭④と進路について話す野島さん④と藤川さん

の成績発表があった。DPは生徒が「言語と文学」「数学」「芸術」など6教科の中から原則1科目ずつを選択。英語だけで受ける科目もある。

問題意識を持つ

DPは、グローバル化に対応できる人材育成のため、批判的思考や情報の検証、議論を組み立てるコミュニケーションといったスキルの養成に力を入れる。生徒には問題意識を持って課題に取り

組む姿勢が問われる。最終試験で一定の成績を収めると、海外の大学への出願資格が得られる。

同校によると、3年生の半数以上が欧米やアジアの大学に出願している。多くの大学はDPの成績などを基に可否を判定。既に合格した生徒も複数おり、進学先は国際色豊かになりそうだ。

「世界トップレベルの研究環境で材料工学を学びたい」と話すのは、英国の大学を目指す藤川

空風さん(18)。授業の一環で島内の海岸を清掃した際、カキ養殖のいかだから出たと思われるプラスチックパイプの破片が漂着しているのを目の当たりにし、海洋ごみの問題を意識した。大崎上島町内のアートイベントで海洋ごみを使った作品を発表。課題から価値を生み出す大切さを学び、材料の製造段階から環境問題の解決に取り組みたいと考えた。

「世界から選ぶ」

入学時は全く話せなかったという英語も授業で親しむうちに「未完成だが、ツールになった」とする。「ここで学んだチャレンジする姿勢を生かしていきたい」と意欲を燃やす。

野島由衣さん(18)は、英国かオランダへの進学を視野に入れる。先進国と途上国がそれぞれ抱える貧困問題について「仕組みを理解し、何ができるか考えたい」と言う。多様な背景を持った人と出会いたいと思い、全国から人材が集まる同校を志望した。「中学から自分の将来を考える機会が多く、自分がしたいことを突き詰められた」。高校2年時の海外視察で「海外進学のビジョンが鮮明になった」という。

県が「学びの変革」の先導校に位置付け、国際バカロレアのプログラムに基づいた授業を実施。英語力の養成のため外国籍の教員による授業や海外研修にも力を入れてい

クリック

広島叡智学園 2019年4月に開校した広島県立の全寮制中高一貫校。留学生を含めて計255人が在籍している。